

2021年5月15日(土)

老球の細道609号

尊敬するコーチ新井春生先生との出会い①

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

山崎純男先生に続いて「トップコーチとの出会い」シリーズ第2弾になる。今回は私の指導者生活において最も影響を与えてくれた新井春生先生について書いてみたい。そもそも日本のトップコーチ、世界のトップコーチから教を請いたいという強烈な願望を持つきっかけになったのは新井春生先生との出会いからである。

中学校からバスケットボールを始めた私にとっては、目指す目標は「会津でなんぼ」の世界であった。当時から100年前、わが会津の先輩達は戊辰戦争で全国レベルの戦いをやっていたのに誠に情けない話であるが……。高校になってからよもやの県大会優勝を果たし、初めて思いもよらなかった全国レベルを知るようになる。

大学では生まれて初めて全国大会へ出場し、それまで敵なしと思い込んでいた自分のスキルが全国ではまるで通用しないことを思い知らされた。全日本学生選手権(インカレ)には3回出場したが全て予選リーグ敗退。何が違うのか、予選で試合が負けた後でも代々木体育館などに決勝戦まで通い詰めて勉強したことは今でもよい思い出である。

そんな中で印象に残ったのは当時「市邨学園短期大学」(現名古屋経済大学)と呼ばれた名古屋の短大チームであった。そのチームが短大でありながら4年生の大学チームを破りインカレで初優勝をしたのである。昭和49年(1974年)11月24日の出来事で、決勝の相手は日体大で83対59の完勝。創部9年目の快挙であった。

このゲームを私は代々木第二体育館で直接観戦していたが、市邨の選手のドリブルワーク、ワンハンドシュート、そしてエースの中村千代美選手(3年生から大阪体育大学に編入し4年連続インカレ得点王、後に全日本)のセンタープレイでのピボットワークは当時の女子選手の常識を覆すプレイだった。

〈付記:数年前、中村千代美さんから、新井先生の祝賀会やワールドスポーツなどについて突然電話をいただき驚きと感動を経験した〉

そして、男子顔負けの女子プレイヤーに仏のような慈顔で指揮していたのが新井春生先生だった。その時が先生を間近で見た最初であった。それまでは当時日本で唯一発行されていたバスケット月刊誌『バスケットボールイラストレイテッド』に掲載されていた新井先生の技術論でしか知らなかった。しかし、その衝撃のインカレ初優勝から新井先生の存在感が私の中では大きくなった。

新井先生は島根県出身で元々は中学校の先生であった。島根大学でバスケットボールをプレイしていたことで地元の安来高校女子からコーチを依頼され、昭和32年静岡国体で安来高校を全国優勝させている。その時の実績を買われて名古屋の安城短大付属高校に赴任した。ここでも秋田インターハイで優勝し、その後市邨短大に移籍。先生が行くチームはすべて全国優勝を果たしている。また五輪選手、日本代表も数多く輩出している。〈続く〉